

志賀直哉年譜考（九）

——明治三十八年一月から十二月まで——

生 井 知 子

明治三十八年（一九〇五）（数え二十三歳・満二十一歳～二十二歳）

1・1（日） 午前、木下利玄が年始に志賀家に来宅。（木下利玄日記）

直哉は、「出エジプト記」第二十章及び「申命記」第七章について日記に記す。青山墓参。内村鑑三の所に行く。有島生馬の家に集まり、江木本店で柳谷午郎・志賀直哉・田村寛貞・白杉義雄・米津政賢・松平春光・有島生馬で写真撮影。大金、東橋亭に行く。（日記）（『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真）

1・2（月） 直哉はハーンの本“A Japanese Miscellany”（『日本雑録』）を読む。（日記）

木下利玄が直哉に手紙を書く。年末に鶴沼からの葉書を受け取った、正親町公和が昼から志賀家に行くと言うから、色々伝言を頼んだとのこと。（木下利玄日記）（『志賀直哉宛書簡』）

1・3（火） 直哉は前夜ハーンの“Of a promise broken”（『破約』）を読み、恐ろしい初夢を見る。朝は“Before the Supreme Court”（『閻魔の庁に』）を読む。（日記）

午後、里見淳が、菅田敏光と共に、錦絵を見て初めて志賀家を訪問。里見淳は国貞の「車曳人形」の三枚続きを一番欲しいと思う。直哉は、初お目見えの芳三郎・徳三郎を見に行こうと誘うが里見淳は断る。里見淳は翌日から鎌倉の

別荘で読もうと、泉鏡花の小説の載った古い「新小説」、『風流線』、ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロを沢山借りて帰る。(日記)〔里見弴『君と私』七〕

直哉は、夜、田中平一と新富座で観劇。「太閤記鷲の森砦」「女兒雷也」を見る。市蔵、徳三郎、芳三郎など。(日記)〔続々歌舞伎年代記〕坤の巻)

1・4(水) 直哉は午後、田中平一と新富座で観劇。「暁星影」「竹生島」「どんつく」を見る。徳三郎、芳三郎。ハーンの“The

Story of Kwashin Koji.”(『果心居士』)を少し読む。(日記)〔続々歌舞伎年代記〕坤の巻)

有島生馬が、直哉に、若い女性の横顔の自筆絵葉書を書く。ラファエロ、ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ三冊のお礼。(『志賀直哉宛書簡集』)

1・5(木) 朝、直哉は有島生馬を誘って岩倉道俱を訪問。帰り木下利玄の家に寄り、午後木下利玄と帰宅。夜、田中平一と東橋亭に行く。団栄の「御所桜堀川夜討」三段目、文福の「伽羅先代萩」六段目(竹の間、昇之助の「伽羅先代萩」六段目(御殿)を聞く。有島生馬の家に泊まる。(日記)

1・6(金) 直哉は終日有島家で過ごす。『一葉全集』『本朝故実因縁集』五巻を借りる。(日記)

1・7(土) 直哉は、ハーンの“The Story of Kwashin Koji.”“The Story of Kogi the Priest”(『僧興義』)を読み、“Strange Stories”の部分だけは読み終わる。一葉『にぎりえ』を読む。午後四時より、田中平一と演伎座で観劇。「麻布七不思議」「道成寺」を見る。団童、九女八など。(日記)〔続々歌舞伎年代記〕坤の巻)

1・8(日) 直哉は、「ルカ伝」第十五章について日記に記す。(日記)

1・9(月) 学習院の始業式。黒木三次・石渡荘太郎・上田操が志賀家に来宅。直哉は上田に『リビングストーン伝』を貸す。有島生馬來宅。夜、黒木三次と歌舞伎座で観劇。「花川戸侠俎」「小女郎狐基盤忠信十二段」「初霞彩住吉」を見る。ハーンの“A Japanese Miscellany”を木下利玄に渡す。(日記)〔続々歌舞伎年代記〕坤の巻)

1・10(火) 高田村の敷地に、学習院職員・学生が集まり旅順陥落祝勝会。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「記事摘要」(日記))

直哉は、昨晚、荒物屋の婆さんが締め殺されたと日記に記す。(日記) ↓ 『黒犬』のモデル

1・11(水) 直哉は、田中平一・細川護立・木下利玄と、歌舞伎座で観劇。「都大路勇春駒」「望月」「花川戸侠俎」「小女郎狐碁盤忠信十二段」「初霞彩住吉」を見る。羽左衛門、吉右衛門、松助、八百蔵など。ハーンの本「Exotics and Retrospectives」(「異国情趣と回顧」)を木下利玄から受け取る。(日記)(『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

1・12(木) 直哉は清の妹についての夢を見、日記に記す。自分のことを『近江』という名で書く。(日記)

1・13(金) 直哉は有島生馬・黒木三次と丸善に行く。ロングフェローの詩集を買う。(日記)

1・14(土) 直哉は清風亭で歌留多会の後、牛込亭で木下利玄・正親町公和と合流。素行の「岸姫松轡鑑」、峯子の「碁太平記白石嘶」七段目(揚屋)、巴勝の「箱根靈驗覽仇討」、組幸の「傾城阿波の鳴門」八段目を聞く。木下利玄から「心の花」を借り、大塚保治の『イブセンの社会劇「人形の家」に就いて』を読む。(日記)

1・15(日) 直哉は、「ルカ伝」第十六章第一節より第十五節までについて日記に記す。直哉が司会者の筈だったが、内村鑑三が在宅のため普段通りだった。(日記)

木下利玄と中野辺りを散歩の予定だったが、木下の病気のため中止。木下が直哉に断りの手紙を書き、新宿駅まで弟に持参させる。(日記)(『志賀直哉宛書簡集』)

1・16(月) 直哉は、木下利玄と広勝をモデルにした小説を考える。(日記) ↓ 後の未定稿14『お竹と利次郎(梗概)』、未定稿8にも腹案中としてメモあり。

1・17(火) 「作文」で「休暇中の一節」というテーマが課せられる。夜、直哉は昇之助の「艶容女舞衣」酒屋の段、綾登司の「又助」、広勝の「明烏夢泡雪」山名屋の段、小土佐の「日吉丸稚桜」、呂行の「廓文章」(吉田屋)、文福の「三枚橋」

を聞く。菅田敏光の兄に有島生馬から借りた『一葉全集』などを貸す。(日記)

1・18(水) 前日見合いたした岩倉道俱が、直哉の許に結婚の相談に来る。岩下家一、田中平一が来宅。(日記)

1・19(木) 夜、直哉は黒木三次と喜吉亭に行く。綾登司の「菅原伝授手習鑑」、広勝の「恋娘昔八丈」鈴ヶ森の段、小土佐の

「玉藻前曠袂」三段目、呂行の「生写朝顔話」宿屋の段、文福、昇之助の「新版歌祭文」野崎村の段を聞く。(日記)

柳宗悦を介して丸善にイブセンの「The Doll's House」(「人形の家」)を注文。(日記)座談会『白樺』座談会)

1・20(金) 直哉は「帝国文学」の大塚保治「ギュスタープ・モローの絵画」を読む。(日記)

1・21(土) 午後、直哉は木下利玄と有島生馬の病床を見舞う。中西屋で幸田露伴「心のこと 出廬」、丸善でイブセン「Hedda

Garda」(「ヘッダ・ガブラー」)などを買う。木下も広勝を愛するという。(日記)

1・22(日) 直哉は、「コリント前書」第十二章について日記に記す。(日記)

直哉は、木下利玄に相合い傘の行列の絵葉書を書き、一本あまりがあると記す。(M38・1・22木下利玄宛書簡)

1・23(月) 直哉は、夜、一人喜吉亭に行く。昇之助の「傾城阿波の鳴門」を聞く。(日記)

木下利玄が直哉に絵葉書を書き、広勝が語物表を置いていった、傘が入用の時節が来るかも知れないと記す。(「志賀直哉宛書簡集」)

直哉は夜、二十六日にすべき演説「富」の草稿を書く。(日記)

1・24(火) 直哉は夜、二十六日にすべき演説「富」の草稿を書く。(日記)

志賀直哉・木下利玄・正親町公和・川村弘・吉光長一で、『歌枕五人男』「第一巻 露の苔ツグの巻」という回覧ノート
を授業中に廻して書き始める。『歌枕五人男』の中で、川村弘は団榮を最眞にし、直哉は素行を高く評価する。(新

『志賀直哉全集』補④(紅野敏郎「利玄・直哉らの『歌枕五人男』」S 59・12「文学」)

1・25(水) 直哉は寒気がして午後の授業を休む。(日記)

1・26(木) 直哉はインフルエンザとの診断を受ける。(日記)

木下利玄が直哉に見舞いの手紙を書く。(『志賀直哉宛書簡』)

里見弾が直哉に新派の相合い傘の行列の自筆絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

1・27(金) 直哉は高熱で具合が悪い。(日記)

志賀直温、総武鉄道株式会社専務取締役に就任。(志賀家系図(第三版『帝国鉄道要鑑』))

1・28(土) いくらかよくなった直哉は、手紙を書いたり、一葉の『雪の日』『たけくらべ』などを読む。(日記)

1・29(日) 疲労のため、直哉は内村鑑三の所を休む。田中平一が来宅。(日記)

1・30(月) 朝から、川村弘・木下利玄・田中平一が志賀家に来宅。(日記)

有島生馬が直哉に手紙を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

1・31(火) 直哉は登校。「作文」は「寒夜」を書く。帰途、有島生馬を訪問するが留守で、木下利玄を訪問。(日記)

2・1(水) 直哉は気分が優れないが、「帝国文学」の夏目漱石『倫敦塔』と「吉田屋」の上巻を読む。ハーンの『牡丹灯籠』を

読む。(日記)

*『愛読書回顧』によれば、夏目漱石は最も愛読した作家で、『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『野分』『草枕』等、繰り返し読んだ。雑誌が出るのを待ちかね、貪り読んだ。人間の行為心情に対する漱石の趣味・好悪に同感した。漱石の初期のものにはユーモアとそういう一種の道念が気持ちよく溶け合っていた、という。

2・2(木) 雪の日だが、直哉は気持ち沈んでいる。南日恒太郎、瀬川秀雄、桜井政隆の授業。木下利玄が来宅。六時半から服部他之助の家の会合に行くが、これも面白くない。柳沢保承が病氣と聞いたので葉書を出す。(日記)

2・3(金) 直哉は田中平一と共に宮戸座で観劇。「蟒お田高評仇討」「中将姫当麻縁起」「恋飛脚大和往来」を見る。源之助、寿美蔵、訥升など。源之助に感心する。(日記)(続々歌舞伎年代記) 坤の巻

2・4(土) 旧学習院長・立花種恭の葬儀のため、授業は休止し、職員・学生一同葬送。(学習院一覧 明治三十八年九月～三十九年

八月「記事摘要」（日記）

直哉は葬儀には行かず、朝から手紙を八通出す。午後正親町公和の家へ行く。（日記）

酒匂の有島生馬が直哉に自筆絵葉書を書く。翌日帰京とのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

この頃か？ 直哉は「好源齋」と署名した書簡で、里見弴を「蟒お由高評仇討」に誘う。（里見弴『君と私』七）

2・5（日） 内村鑑三の所が休講だったので、直哉は雑談して帰途、岩倉道俱の家に寄る。芸者買いの話で不快。帰京予定の有島

生馬を訪問するが不在。（日記）

2・6（月） 直哉は「物理」を休んで、田中平一と明治座で観劇。長田秋濤翻案の「王冠」を見る。川上音次郎、貞奴、高田実な

ど。（日記）（『続々歌舞伎年代記』坤の巻）

2・7（火） 直哉は、松村務の父・松村務本の病死のお悔やみに行く。（日記）

2・8（水） 直哉は若竹亭に行く。川村弘・木下利玄・岩倉道俱・有島生馬・藤島武二に会う。団菜の「生写朝顔話」宿屋の段、

大吉の「増補忠臣蔵」（本蔵下巻）、昇之助の「近頃河原達引」堀川の段を聞く。昇之助は不出来。円通寺の有島生馬

の下宿に泊まる。（日記）

志賀直哉・木下利玄・正親町公和・川村弘・吉光長一で、『歌枕五人男』二冊目「紅梅の巻」という回覧ノートを授

業中に廻して書き始める。（『新』志賀直哉全集）補④（紅野敏郎『利玄・直哉らの「歌枕五人男」』S 59・12「文学」）

2・9（木） 直哉は九時頃起き、関伽井で顔を洗う。藤島武二の画室を一寸見る。夜、服部他之助の家の会合。その後、黒木三次

が来宅。（日記）

*『蝕まれた友情』（二）に書かれたのは、この日のことか？

2・10（金） 直哉は里見弴らと宮戸座で観劇。直哉と里見弴は、芝居・錦絵を主な話題に段々親しくなる。（日記）（里見弴『君と私』

七）

- 2・11(土) 直哉は『子供』という題で、「米ッちゃん」「仙太」「お染」「雪雄」「新八」「鳥吉」「可丸」などを書こうとするが出来ない。(日記)↓後の未定稿8の作品名メモ参照。
- 2・12(日) 直哉は内村鑑三の所に行く。「ダニエル書」第二章。(日記)
木下利玄が直哉に絵葉書を書く。消印十三日。(志賀直哉宛書簡集)
- 2・14(火) 有島生馬が直哉に自筆絵葉書を書く。(志賀直哉宛書簡集)
- 2・15(水) 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。(志賀直哉宛書簡集)
- 2・16(木) 夜、直哉は服部他之助の家の会合に行く。(日記)
- 2・18(土) 松方金次郎・岩下家一・田中平一が来宅。直哉は三月五日の輔仁会の大会である演説「品性」の下書を完成。(日記)
↓未定稿4『品性の感化』
- 2・19(日) 直哉は「ダニエル書」第三章について日記に記す。(日記)
木下利玄が直哉に手紙を書く。(志賀直哉宛書簡集)
- 2・20(月) 直哉は、夜、志賀直道と立花亭に行く。末勝の「由良湊千軒長者」中の巻(山別れ、光之助の「摂州合邦辻」、素行の「契情曾我廓龜鑑」(小磯ヶ原)、広勝の「日吉丸稚桜」、東糸の「恋飛脚大和往来」(新口村)、長年などを聞く。素行に感心する。(日記)
- 2・21(火) 直哉は帰途、黒木三次・木下利玄と里見弾の家に行く。夜、四五枚葉書を出す。(日記)
- 2・22(水) 直哉は学習院を休む。木下利玄の家に行き、広勝の写真を見る。立花亭に行く。末勝の「心中紙屋治兵衛」(紙治、光之助の「玉藻前職袂」三段目、素行の「恋飛脚大和往来」(新口村)、東糸の「壺坂靈験記」、長年の「菅原伝授手習鑑」四段目を聞く。(日記)
- 2・23(木) 日記に《雛菊》のメモあり。直哉は「英作文」が上出来。夜、服部他之助の家の会合。(日記)

2・24(金) 直哉は回覧ノートに、「輔仁会雑誌」の締め切りはいつか、『仙太』だけ『酒のみの子』とでもいう題で出そうと思っていると記す。(『歌枕五人男』「二冊目 紅梅の巻」補④P.409)

里見弾が、直哉に、Sakujiwa wa Arigato. ところが変名で好源斎という人から手紙を貰ったと絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

2・25(土)

放課後、図書館閲覧室で邦語部例会。松村定次郎「金州実戦談」、直哉「富」、松方金次郎「桃太郎」、武者小路実篤「苦痛」などを演説。(日記)(M38・3「学習院輔仁会雑誌」65号「批評」里川「邦語例会雑感」、「雑報」邦語部例会) 直哉は、一高ポルト部だった鈴木に所属を聞かれて一部と答えたところ、文科ではなく法科志望と思込まれ、《法律へ行つちやつまらんぜ、政治へ来玉へ。今は法律を出たつて金がとれんからナ》と言われた体験を冒頭に語る。(草稿『小説若い銀行員』)

直哉は有島生馬・川村弘と真砂座で観劇。「女夫波」を見る。伊井蓉峰、木下吉之助、中村操など。(日記)(『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

2・26(日)

高等学科・中等学科学生の保証人・父母兄を招いて授業参観。菊池大麓院長より懇話あり。(『学習院一覽 明治三十八年九月』三十九年八月)「記事摘要」(日記)

直哉は「ダニエル書」第四章について日記に記す。午後川村弘が来宅。「煩悶」を文章にする。(日記)

2・27(月)

休みで朝から木下利玄が志賀家に来宅。夜、直哉は宮松亭に行く。素竹、団菜の「伽羅先代萩」六段目(御殿)、文福の「伊賀越道中双六一」六段目(沼津)、昇之助の「恋女房染分手綱」十段目、「弁天小僧」を聞く。昇之助はますます下手なように思う。(日記)

2・28(火)

直哉は『仙太』を出す。(日記)

志賀直哉・木下利玄・正親町公和・川村弘・吉光長一で、『歌枕五人男』「三冊目 雛祭の巻」という回覧ノートを授

業中に廻して書き始める。直哉は昇之助の悪口を書く。(新『志賀直哉全集』補④(紅野敏郎『利玄・直哉らの「歌枕五人男」』S 59・12「文学」)

3・1(水) 『仙太』は男女の事があるからと没書になる。直哉は川村弘・二条厚基・黒木三次と田村寛貞を訪問。(日記)

有島生馬が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

3・2(木) 夜、直哉は服部他之助の家の会合に行く。(日記)

3・3(金) 睦友会例会。直哉・黒木三次・川村弘・松平春光が有島生馬の家に集まり三河屋で食事。松平春光以外は喜吉亭に行く。広勝の「菅原伝授手習鑑」四段目、京之助の「日蓮聖人御法海」三段目(動作住家)、万八の「玉藻前職袂」三段目、峯子の「傾城阿波の鳴門」八段目、組幸の「絵本太功記」十段目を聞く。(日記)

3・4(土) 木下利玄と正親町公和が志賀家に来宅。直哉は尾崎紅葉『関東五郎』を読む。翌日の演説の草稿が完成し、練習する。(日記)

3・5(日) 輔仁会春季大会。(『学習院』覧 明治三十八年九月―三十九年八月)「輔仁会記事摘要」(日記)

直哉は「ダニエル書」第五章について日記に記す。輔仁会大会で「品性」を演説。ハーンのもの。A Passional Karma(『悪因縁』)を読了。(日記)

3・6(月) 直哉は午後、正親町公和と深川に行く。洲崎遊郭を見物。新富座「信州川中嶋」・歌舞伎座「食道楽」を立ち見する。

幸之助、宗之助、芳三郎、訥子など。(日記)(『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

3・7(火) 直哉は前日の所感として、世のいわゆる恋とは肉慾のことではないかと日記に記す。(日記)

日露戦争にて志賀直方、右眼を失明。(3・19日記)

3・10(金) 志賀直哉・木下利玄・川村弘・吉光長一で、『歌枕五人男』「弥生の巻」という回覧ノートを授業中に廻して書き始める。三月二十七日まで。(新『志賀直哉全集』補④(紅野敏郎『利玄・直哉らの「歌枕五人男」』S 59・12「文学」)

- 3・12(日) 有島生馬が直哉に自筆絵葉書を書く。十三日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 3・15(水) 里見弴が直哉に絵葉書を書く。十六日の消印。昨日は長座したとお礼。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 3・19(日) 志賀直方から、負傷したとの手紙が志賀家に届く。(日記)
- 3・26(日) 直哉は、木下利玄に歌舞伎の舞台写真の絵葉書を書く。今日は原作者の見物があるので、役者が熱心だったとのこと。
(M38・3・26木下利玄宛書簡)
- 3・30(木) 直哉からの葉書を受け取った木下利玄が返事を書く。三十一日の消印。夜九時頃、直哉の所へ電話をかけたが服部他
之助の所に行っていて留守だったとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 4頃 直哉は『故国は―』を執筆。学習院を突然免職になった先生が二人いることへの不快、今後はすべての先生が終
生学習院にとどまって教鞭をとれるようにしてほしい、との内容。(未定稿5)
- 4・1(土) 木下利玄が直哉に手紙を書く。直哉の成績は、「国文」「漢文」、英語の「文法」「作文」、「武課」が甲、残りは乙、総
平均が乙、二十四人中九位だった、明日昼頃待っている、とのこと。(『志賀直哉宛書簡』)
- 4・4(火)? 有島生馬送別の為に、睦友会のメンバーら四、五人で鹿野山へ旅行。木下利玄も行った。(里見弴『君と私』八(『歌枕
五人男』「弥生の巻」)(M39・2・6有島生馬宛書簡)
- 4・11(火) 隅田川上流で、輔仁会の第十一回端艇競漕会を開催。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「輔仁会記事摘要」)
- 4・13(木) 学習院で三学期始業式。(M38・6「学習院輔仁会雑誌」66号「雑報」)
- 4・14(金) 木下利玄が直哉に葉書を書く。十五日の消印。旅行中の礼、直哉は四月一杯学習院を欠席すると決心したのかとの質
問など。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 4・18(火) 木下利玄が直哉に手紙を書く。十九日の消印。修学旅行についての報告、木曜か土曜に、『通夜物語』や『新小説』、

旅費などを持って訪問したいとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

4・22(土) 父・木下利永の病気で、二十日朝に足守へ帰省した木下利玄が、直哉に手紙を書く。(『志賀直哉宛書簡』)

4・23(日) 武者小路実篤が直哉に葉書を書く。先日の内村鑑三の演説は大変面白かった、ユーゴの伝記を読んだ、今度の旅行には直哉は行かないそうだが、行ったらどうか、カーライルの伝記や『逆境の恩寵』を読んでいるなど。(『志賀直哉宛書簡』)(『武者小路実篤全集』)

4・26(水) 高等学科及び中等学科二年級以上の学生は、級ごとに二泊の修学旅行。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』
「記事摘要」) 高二(二部の一部)は日光より湯本、高二(二部及び一部の一部)は日光より足尾。(M38・6 [『学習院輔仁会雑誌』66号「雑報」])

4・29(土) 中禅寺湖畔の川村弘が東京の直哉へ手紙を出す。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

日光の正親町公和が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

この頃か? 直哉は武者小路実篤に、田村寛貞の所にトルストイから返事(M38・3・19付、M44・1「白樺」)に掲載が来たと告げ

る。(武者小路実篤『或る男』九十)

この頃か? 有島生馬が、関安子との婚約を、直哉と黒木三次に打ち明け、留学中のことを託す。(『蝕まれた友情』二)

この頃か? 直哉は有島生馬と関安子の結婚問題について、安子の境遇への憐れみから生じたもので純粹の恋愛ではないから結婚

しない方がいいという考えを書く。(未定稿6)

5・2(火) 故郷から帰京途中に京都に立ち寄った木下利玄が、直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

5・3(水) 有島生馬の渡欧に際し、志賀直哉、有島生馬、佐久間忠雄、川村弘、田村寛貞、松平春光、黒木三次、柳谷午郎、杉

山得一ら睦友会のメンバーで丸木で写真撮影。その後、四谷の三河屋で会食。白杉義雄も来る。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)(筑摩書房『日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真)

5・4(木) 靖国神社臨時大祭に付き、学習院学生一同、参拝。(『学習院一覽 明治三十八年九月〜三十九年八月』「記事摘要」)
有島生馬が直哉に、前日の礼と、関安子とのことは心配には及ばない、との葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)
この頃か？(有島生馬の出発の一週間程前)

5・10(水) 直哉は有島生馬と、四谷の停車場の上の堤で一つマントをかぶって話をした。(M39・5・27有島生馬宛書簡)
渡欧に際して、有島生馬が送別の饗宴を蓬萊亭で開く。田村寛貞、志賀直哉、黒木三次、松平春光、川村弘、柳谷午

郎、岩倉道俱、木下利玄が招かれ、里見弴や佐藤隆三ら有島生馬の弟たちも出席。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

5・13(土) 有島生馬の渡欧を、直哉は里見弴らと見送る。睦友会のメンバーは新橋六時発の列車で有島生馬と共に横浜に赴いた。

有島生馬が乗ったのは八時半発のドイツ汽船Roon。(里見弴『君と私』八〔『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

5・14(日) 黒木三次が有島家に里見弴を訪ね、関安子に会う。(M38・5・15有島生馬宛書簡)

ローン号船中の有島生馬が、直哉と黒木三次に絵葉書を書く。神戸の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

5・15(月) 直哉が有島生馬に手紙を書く。神戸からの葉書は受け取った、十九日の午後九時から月を見ないか、離れていても同

じ月を眺めることが出来るから、とのこと。(M38・5・15有島生馬宛書簡)

ローン号船中の有島生馬が、直哉と黒木三次に絵葉書を書く。長崎十六日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

5・18(木) 学習院で邦語演説例会。市原一郎「アルフレッド大王ノ話」、津田章「勇マシキ艦長の最期」、リンカーンの話をした

服部純雄「貧兒ノ成行、偉人ノ生涯」、後藤武保「捕鯨」、塩谷教授「蹈破ル雲山万里ノ程」など。(M38・6「学習院

輔仁会雑誌」66号「雑報」〔『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

5・20(土) 岡山の米津政賢が、直哉に、神戸での有島生馬との再会についての書簡を書く。(M38・6「学習院輔仁会雑誌」66号

「詞苑」〔別離〕)

学習院で剣道大会。(『学習院一覽 明治三十八年九月〜三十九年八月』「記事摘要」)

5半ば 直哉は、里見淳を志賀家に呼んで関安子の事を相談する。この頃、安子は有島家の女中をしていた。(里見淳『君と私』)

九)

5・22(月) 歌舞伎座で、「堀川夜討」「近江源氏先陣館」「土蜘蛛」「弁天娘女男白波」「三軒長屋」を上演。八百蔵の土佐坊昌俊。

(『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

*草稿「第三篇」(四)によれば、直哉は、八百蔵が土佐坊昌俊の芝居をやっている時、歌舞伎座で稲・プリンクリーを見た。その時は、前の夏、箱根へ行く時、国府津からの電車で向かい合ったお嬢さんだと思った。そして性質・趣味すべて立派な人だと想像の中で持え上げていた。その一ヶ月後、麻布の谷町を歩いていて、俥に乗った稲・プリンクリーに出会い、歌舞伎座で見たのも稲・プリンクリーだったと気が付いた。

5・23(火) 香港の有島生馬が、直哉と黒木三次に絵葉書を書く。香港二十五日、東京六月七日の消印。(志賀直哉宛書簡集)

5・25(木) 金田の武者小路実篤が直哉に手紙を書く。高山樗牛の『文明批評家としての文学者』は一読の価値がある、トルストイの『現代の奴隷』の終わりに徴兵のことが書いてある、明日からイブセンの『ロスメルスホルム』を読みたい、今

『イワン・イリイチの死』を読んでいる、とのこと。(志賀直哉宛書簡)(『武者小路実篤全集』)

この頃か? 日露戦争のさなか、直哉は武者小路実篤と戦争に取られたらどうするかを議論し、徴兵を拒否して殺される方が本当

ではないかと述べる。直哉は最後の審判を七分か八分信じていた。(武者小路実篤『或る男』九三)

この頃か? 直哉は、小山内薫の訳した『居眠り』(M38・5「七人」)を読む。チェーホフを読んだ最初。(稲村雑談)『読書』

*対談『志賀直哉氏の文学縦横談』によれば、チェーホフのテーマのあるごく短い短篇・コントを若い頃熱心に読んだし、相当の影響を受けている。『退屈な話』などの面白味が分かって来たのはずっと後のことだという。

*『大洞台にて』では、チェーホフの『居眠り』『カキ』などが好きと発言。座談会『作家の態度』では、『可愛い女』『退屈な話』『六号室』などに感心と発言。

- 5・28(日) 直哉は家族を連れて江ノ島に遊び、木下利玄に葉書を出す。(M38・5・31直哉宛木下利玄書簡)
- 5・31(水) 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 6・1(木) 学習院で、日本海海戦大勝利祝勝会。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』)「記事摘要」)
- 6・4(日) ローン号船中の有島生馬が、直哉と黒木三次に絵葉書を書く。コロソポ五日、麻布二十九日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 6・6(火) 旧学習院長・立花種恭の追悼会ならびに、学習院出身の戦死者、宮内盛一・小山能文・南部利祥の追悼会。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』)「輔仁会記事摘要」)
- 6・17(土) 直哉、木下利玄、川村弘が喜吉亭に行く。(『芳舟遺稿』所収M38・6・19正親町公和宛川村弘書簡)
- 6・20(火) 昼から、細川護立・木下利玄・川村弘が志賀家に來宅、直哉と「漢文」の試験勉強をする。(『芳舟遺稿』所収M38・6・19正親町公和宛川村弘書簡)
- 6・21(水) 里見弾が直哉に手紙を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 直哉は、「学習院輔仁会雑誌」第六十六号「批評」欄に「奈加葉」の署名で『前号詞苑同人評』の「江戸の花はるさむ」と『鼓艸(はるさむ)』評、「半月」の署名で『五月十八日 邦語演説例会略評』を発表。(新『志賀直哉全集』^⑩)
- 6・25(日) 里見弾が直哉に鹿野山に一緒に行ってほしいとの手紙を書く。(『志賀直哉宛書簡』)
- 7・1(土) 木下利玄が直哉に葉書を書く。今晚、呂昇とはうらやましい、明日は清水澄の所へ皆で行くので是非参加してほしい、とのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 7・3(月) 直哉は、この日まで三日連続で呂昇を聞いて感心した。(『芳舟遺稿』所収M38・7・4正親町公和宛川村弘書簡)
- 直哉は、この日、呂昇の「艶谷女舞衣」酒屋の段を聞いた後、少なくとも九月十一日までは一度も義太夫を聞かない。

(M38・9・11有島生馬宛書簡)

7・7(金) ローマの有島生馬が、直哉に、手紙のお礼、関安子の事について増田英一や山本愛子と相談してくれる好意への感謝、安子の事を田村寛貞にも話してほしい、との手紙を書く。(『志賀直哉宛書簡』)

7・9(日) 直哉は旅行から帰宅。(M38・7・10直哉宛木下利玄書簡)

7・10(月) 木下利玄が直哉に手紙を書く。直哉が旅から出した便り・白樺二葉を今朝受け取った、呂昇は素晴らしい、今晚正親町公和の家に行かないか、など。(『志賀直哉宛書簡』)

7・12(水) 学習院卒業証書授与式。(『学習院一覽 明治三十八年九月〜三十九年八月』「記事摘要」)

7・15(土) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマ十六日、麻布八月二十二日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

夏 直哉は、里見弴・黒木三次と元箱根で生活する。読書・小説の朗読会・ポルト遊びなどをする。途中から柳沢保承も家扶に連れられて来る。(里見弴『君と私』十)

直哉は、芦ノ湖畔で一夏かかって、ズーデルマンの『デーム・ケア』(『憂愁夫人』『フラウ・ゾルゲ』)を読んだ。面白かった。ハウプトマンやズーデルマンは、箱根でこつこつ読んだ。(『S君との雑談』(座談会『回顧』))

芦ノ湖に潜って烏貝を沢山取った。黒い小さな真珠が入っていた。(対談『秋の夜話』)

7・20(木) 有島生馬が、直哉にポッティチェリ画「春」の絵葉書を出す。ロッカ・デイ・パバ二十五日、麻布九月十日の消印。

(『志賀直哉宛書簡集』)

木下利玄が、箱根の石内九郎吉方の直哉に手紙を書く。東京座の評判を面白く拝見した、『ノラ』は学習院の水泳の荷物の中に入れて出してしまったので、明日から行く片瀬で出来るだけ早く読んで小包で送る、とのこと。(『志賀直

哉宛書簡集』)

7・22(土) 川村弘が直哉が二十一日に箱根から出した『RE』及大隅一座の評評ありがたく拝見致候。REは今年も亦当地に参る

やうな噂は御座なく候や当地へ参りてよりは新聞と云ふもの少しも見申さず候間珍らしき事も有之候は、御切抜き御送り被下度」という手紙を受け取る。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

7・23(日)

武者小路実篤が、箱根の直哉に水泳での生活の報告の葉書を書く。モリツの神話を讀むつもり、『アンナ・カレエーナ』は讀み終わった、とのこと。(『武者小路実篤全集』)

*直哉に頼まれて、武者小路実篤は、学習院の水泳の風儀をよくするために参加した。(武者小路実篤『或る男』九十八)

7・24(月)

片瀬の水泳に行っている木下利玄が、箱根の直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・28(金)

片瀬の水泳に行っている木下利玄が、箱根の直哉に手紙を書く。二十九日の消印。先日柳沢保承が来遊、今頃は柳沢も箱根だろうとのこと。同封された武者小路実篤の手紙には、直哉からの手紙を受け取ったこと、直哉が讀んでいる『フラウ・ゾルゲ』のこと、水泳は風儀上問題がないことなど。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・31(月)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ロッカ・デイ・ババの消印、麻布九月十日の消印。避暑に来た、岩の聖母堂がある、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・?

志賀直温、日本醋酸会社監査役満期改選の結果、取締役に選任される。(志賀家系図)

8・?

この時点で、総武鉄道株式会社は社長・青田綱三、専務取締役兼經理課課長・志賀直温、持ち株は、相馬順胤が四三一〇株、志賀直温が一六〇九株、石川栄昌が一五三〇株、青田綱三が一二八〇株、二宮尊親が七二六株。明治三十八年上半期の総武鉄道株は、払込額五十円、時価六十五円六十銭、配当率一割。(第三版『帝國鉄道要鑑』)

8・10(木)

武者小路実篤が箱根の直哉に葉書を書く。天気が悪いので江ノ島周遊、遠泳は中止になった、風儀上の問題は起こらなかった、とのこと。(『武者小路実篤全集』)

8・11(金)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマの消印、麻布九月十四日の消印。「輔仁会雑誌」のことを書いた葉書を受け

取ったことなど。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・12(土)

直哉が、黒木三次、里見弾、柳沢保承と箱根宿の石内という昔の本陣の離れを借りている時、芦の湯の紀伊国屋に来ている志賀直道から、志賀直方が感状を受け取った事を告げる葉書が届く。(『祖父』二十三)

この頃

里見弾は母・有島幸子からの手紙を誤解して帰京。まもなく直哉も、一旦帰京し、里見弾と真砂座に「業平文治」(八月十三日初日、『続々歌舞伎年代記』坤の巻)を見に行く。小山内薫と会う。帰りが深夜になり、里見弾は母からひどく叱られる。有島幸子は里見弾が直哉の所に行くのを喜ばないようになる。(里見弾『君と私』十一)

8・25(金)

金田の武者小路実篤が直哉に手紙を書く。プラトンの『饗宴』を読んでいる、ゴリーキーの短篇(『マカル・チュドラ』)を一つ読んだ、など。(『武者小路実篤全集』)

8・30(水)

金田の武者小路実篤が直哉に手紙を書く。(『武者小路実篤全集』)

夏

志賀直道、食道癌(胃癌)と判明。(『祖父』二十四)(『祖母の為に』)

9

高等学科三年に進級。……

9・2(土)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマの消印、麻布十月六日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

9・5(火)

日露講和条約の内容に憤慨した国民が、日比谷焼き打ち事件を起こす。(M38・9・6「日本新聞」)

9・6(水)

直哉も、志賀家から帝大医学部に通っていた親戚の太田登志彦と共に、志賀英子・直三を連れて見に行く。(『志賀直哉全集』月報9「実吉英子『若い頃の兄志賀直哉の憶い出』」)

9・7(木)

生馬宛書簡)

9・9(土)

正親町公和が直哉に絵葉書を書く。八日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

9・11有島生馬宛書簡

*直哉と黒木三次は、自分たちの小遣いの中から僅かな金を割いて、関安子に渡していた。（『蝕まれた友情』二）

9・11(月) 学習院で学年始業式。（M38・12「学習院輔仁会雑誌」67号「雑報」）

晩、直哉は、柳沢保承を訪問。青木直介、柳宗悦、岩倉具重、山沢鉄五郎、田村寛貞、川村弘もいる。皆で品川の海に舟を出して遊ぶ。（『芳舟遺稿』所収川村弘日記）

直哉は有島生馬に手紙を書く。昨晚、ポツティエリの絵葉書が、今日、また別の絵葉書が来た、田村寛貞には先日君のことを詳しく話した、関安子の近況など。（M38・9・11有島生馬宛書簡）

9・12(火) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマの消印、麻布十月二十五日の消印。箱根からの便りが届いたとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

9・14(木) 直哉は木下利玄に絵葉書を書く。（M38・9・14木下利玄宛書簡）

9・? 研究部（邦語）委員に、武者小路実篤・松島龍蔵・志賀直哉が選ばれる。（M38・12「学習院輔仁会雑誌」67号「雑報」）

9・24(日) 直哉は、ゴリキー『降魔』を翻訳。（未定稿7）

*『中野好夫君にした話』によればゴリキーの短篇で途上所見のような小品を訳したことがあるという。

*ゴリキーのごく初期の物は威勢がよくて特に好きだった。（『愛読書回顧』（『稲村雑談』）『読書』（対談『志賀直哉氏の文学縦横談』）

*直哉は、一学期学校を休んで、家でゴリキーの長編『フォマ・ゴルディエフ』を読んだ、八十ページ位まで読んで止めてしまったが、そこまでは面白かった、と述べている。（『S君との雑談』（座談会『志賀直哉日記をめぐって』）

9・30(土) 直哉、柳谷午郎、黒木三次、川村弘らの睦友会会員と里見淳は、染井墓地に森田明次の墓参をし、有島生馬に寄せ書きの葉書を送る。その後、直哉・柳谷・黒木・川村で向島に遊んだ。（『芳舟遺稿』所収M38・9・30、10・13有島生馬宛川

村弘書簡(M38・9・11有鳥生馬宛書簡)

直哉は円通寺に行き、関安子の母と話したか。(M38・9・11有鳥生馬宛書簡)

9末

志賀直道が寝付く。(祖母の為に)

この頃か?

輔仁会大会の講演を、直哉は、内村鑑三か夏目漱石に頼みたかったが、上田敏に頼むことになった。引き受けて貰った後で、菊池大麓院長が反対し、その命令で、直哉は同じ邦語部委員の武者小路実篤と共に、講演を断りに上田敏を訪問した。その際、直哉と武者小路は親しい友になろうと約束した。この日、武者小路ははじめて自分の恋について話した。この頃、直哉は男同士の恋で苦しんでいた。この日、上田敏にメーテリングのことを教わった。(武者小路実篤『或る男』八十九(未定稿)『或る旅行記』五(座談会『白樺』座談会))

10・?

この時点で、甲武鉄道株式会社を持ち株は、志賀直温が九六八株、青田綱三が五五〇株。明治三十八年上半年の甲武鉄道株は、払込額四十五円、配当率一割。(第三版『帝国鉄道要鑑』)

10・5(木)

放課後、図書館閲覧室にて邦語部例会。(M38・12「学習院輔仁会雑誌」67号「雑報」)

10・10(火)

この時点で、第一部三年級は、吉光長一、斉藤博、仙石政恒、木下利玄、細川護立、石原晋太郎、酒井忠克、北島貴孝、徳川慶久、正親町公和、武者小路実篤、加藤泰吉、志賀直哉、三島弥吉、川村弘、裏松友光、林忠一、二條厚基、黒田長敬、真田幸久、福井発太郎、伊東太郎、前田利彭、毛利元雄。(『学習院一覽 明治三十八年九月―三十九年八月』)

この日、菊池大麓院長が辞表を提出。考えが宮内大臣と対立し、四月以来努力してきたが、ついに辞めざるを得なかったためという。(『芳舟遺稿』所収M38・10・18川村弘日記)

10・12(木)

直哉は赤城の紅葉を見ようと旅行に出かける。この日、菊池大麓院長の免官と高等学科の廃止が学習院学生に伝えられるという大事件が起こった。木下利玄は直哉に報告の手紙を書く。(『志賀直哉宛書簡』(『芳舟遺稿』所収M38・10・13有鳥生馬宛川村弘書簡))

* 明治三十八年十月から学習院院長事務取扱、明治三十九年一月から四十年一月まで学習院院長は、山口銳之助。
 (『学習院史』)

直哉は、輔仁会で休みが続くので、一人で旅行した。赤城に回るつもりだったが、赤倉の香巖楼で予定を変更し、直津、伏木、高岡、金沢、京都の沢文を旅行。伏木行きの上船の上で、明け方、立山の剣山の後から金色の曙光が上って来、銀色の月が向こうの能登半島に下りて行くのを見、自然を本当に美しいと思う。(座談会『志賀直哉日記をめぐって』(『旅』(早春の旅) 三) ↓『暗夜行路』(第一六)のモデル

草稿『一日二晩の記』に『以前海江田と鉄のゐた沢文の控宅の前』で『あの時分程苦しいと感じた事はこれまでの生涯になかった。もう五年程前の事になる。然しその苦みもあの旅行で和げる事が出来たのである。』と思うところがある。

10・18(水) 学習院記念日で式後、輔仁会秋季大会。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

10・23(月) 横浜の観艦式に行った武者小路実篤らが、直哉に寄せ書きの葉書を書く。(『武者小路実篤全集』)

10・25(水) 三日にわたり立川方面へ秋季行軍。直哉は、第一中隊の曹長、第三小隊長、第二中隊の曹長などを務める。(M 38・12
 『学習院輔仁会雑誌』67号「秋季行軍記事」)

児島喜久雄が直哉に絵葉書を書く。大阪では面白かっただろうとのこと。(『志賀直哉宛書簡』)

この頃か? 女の雑誌の口絵に、日露戦争が済んだ祝の宴会でした、稲・プリンクリーが大和姫に扮した活人画が出たか? (草稿

『第三篇』四(『天津順吉』第一三)

この頃か?

直哉は「ノート1」を使い始める。夏目漱石『吾輩は猫である』についての感想や、もし自分がキリスト教に接していなかったら社会主義に喜んで飛び込んでいたであろうことなどを記す。(新『志賀直哉全集』補⑤P 328~329)

11・4(土)

五時からウォルフの送別会を富士見軒で開く。直哉、川村弘、細川護立も出席。帰路、田村寛貞、柳谷午郎、直哉、

川村弘で睦友会の会合について相談。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマ五日、東京麻布十二月十四日の消印。森田明次の暮参の葉書が届いたとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・6(月) 里見弾が直哉に手紙を書く。七日の消印。前日見た本郷座「己が罪」の劇評。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・7(火) 直哉は、木下利玄に、フリードリッヒ大王の銅像の絵葉書を使って、『フレデリック大王伝』を勉強する愚痴を書く。(M38・11・7木下利玄宛書簡)

11・23(木) 武者小路実篤が、直哉にイブセンについて葉書を書く。(『武者小路実篤全集』)

11・26(日) この前後から十二月末にかけて、直哉は丸善に洋書を多数注文している。ボッカチオ、ハウプトマンの“The Sunken Bell”(『沈鐘』)、トマーデの“Sappho”(『サッフォー』)、フランデスの“The history of modern Scandinavian Literature”(『ノロの戯曲集』“Whitney’s German Grammar”)、イブセンの書簡集、戯曲集、“The Wild Duck”(『野鴨』)、“Rosmersholm”(『ロスメルスホルム』)、“The League of Youth”(『青年同盟』)、“Emperor & Gallian”(『皇帝とガリラン人』)、ローリキーの“Three of Them”(『三人』)、“The Orloff Couple & Malva”(『オルロフ夫妻 マルヴァ』)、“Makar Chudra”(『マカル・チュヅラ』)、“Song of a Falcon”(『鷹の歌』)など。イブセン、メーテルリンク、ダヌンツイオなど、欲しい本のリストもあり。

年末頃か、所蔵する本のリストも作成。トルストイの“Kreutzer Sonata”(『クローイツェル・ソナタ』)、“The Death of Ivan Iyich”(『イワン・イリイチの死』)、“A desperate Character”(『絶望的な性格』)、“ビメルンン”、“ローリキーの“Foma Gordyeff”(『フォマ・ゴルディエフ』)、“Orloff & his wife”(『オルロフ夫妻』)、“The Outcasts”(『浮浪人』)、“チェーホフの“The Black Monk”(『黒衣の僧』)、“イブセンの“Little Eyolf”(『小さなアイムエルフ』)、“The Master Builder”(『棟梁ソルネス』)、“Nora”(『人形の家』)、“Ghosts”(『幽霊』)、“Brand”(『トランズ』)、“Hedda

Gabler” (『クッタ・ガブラー』)、“John Gabriel Borkman” (『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』)、“When We Dead Awaken” (『わたしたち死んだ者が目覚めたとき』)、“Peer Gynt” (『ペール・ギンント』)、“Pillars of Society & An Enemy of Society” (『社会の柱 社会の敵』)、“Dame Care” (『憂愁夫人』)、“The Joy of Living” (『生の喜』)、“マヌンツィオの” “The Dead City” (『死都』)、“The Flame of Life” (『炎』)、“The Triumph of Death” (『死の勝利』) など。蓄音機無声盤のリスト(義太夫や小さんなど)もあり。(「ノート1」補⑤P 329～331)

*ダヌンツィオの『死の勝利』は、有島生馬から梗概を聞かされ英訳で持っていたが、内村鑑三の影響で避けねばならぬと思いい、読まなかった。(『中野好夫君にした話』(座談会『志賀直哉日記をめぐって』))

11・27(月)

直哉は、自分の作品名のメモを記す。既成作品として、『雪雄』(↓未定稿3)『嶋吉』『農夫』(トルストイお伽話より)

『追魔』(ゴルキー)(↓未定稿7)『富貴色悪魔誘惑』『小品 小供』『仙太』『芳子』『雪雄』。腹案中として、『脱営』『水車』(↓後の未定稿23、24、39)『利次郎 お竹』(↓後の未定稿14)『総てを神より』(バイオリニストの死)。「長生法」、『小品 小供』『新八』『清』『米ッちゃん』『お染』『嶋吉』『Paul』(口笛を吹けぬ事)『Foma』(鳩を見て自由を慕ふ事)

『Foma』(学校に初めてあがりし時の事)「可子」などのメモあり。(未定稿8)

*『Paul』(口笛を吹けぬ事)は『憂愁夫人』、『Foma』(鳩を見て自由を慕ふ事)『Foma』(学校に初めてあがりし時の事)は『フォマ・ゴルディエフ』の主人公。

11・28(火)

直哉は『〇竹とり物語の梗概を読む、新曲カグヤ姫と同じなり。』『〇住吉物語の梗概も読む、』とノートに記す。

(「ノート1」補⑤P 332～333)

*直哉は『愛読書回顧』で、坪内逍遙の『新曲赫映姫』に刺激されて平安朝のものも読んだと回想している。

11・29(水)

直哉は、ノートに『若き男女が一生其愛を続けん事を願ふは恰も、彼の一生、一本の蠟燭の輝かんを望むが如し』という『クロイツェル・ソナタ』の一節への反論を記す。『とりかへばや物語』の梗概も読む。(「ノート1」補⑤P 334～)

35) ↓未定稿157 『次郎君のアップフェヤ』、『暗夜行路』(第一一三)

11・30(木) 真砂座で三遊亭円朝原作の「名人長次」を上演。(『続々歌舞伎年代記』 坤の巻)

*『モオパッサン全集』推薦』に「昔、中洲の真砂座で伊井蓉峰が「名人長次」といふ円朝ものの芝居をした事がある。その時、私は有島壬生馬から此話の種はフランスの小説で、有島の母君が円朝に話して聴かせたのを翻案したものだ」と聞いた事がある。然し有島はその原作が誰れの小説であるかは知らなかった。後年分つた事であるが、その種本といふのはモウパッサンの「親殺」だつたのである。発見者は馬場孤蝶だつた。』とある。

この頃か？ 直哉は志賀直道の胃痛について記す。(未定稿17)

この頃(暮近くなつて)

志賀直道の病状が悪くなり、食物も喉を通らなくなつて滋養浣腸をする。直哉は、助かるあてのない人間をいつまでも苦しめるのは残酷だと思ひ、内村鑑三に相談するが、内村は明答を避けた。この頃の志賀留女の看病振りをはじめましかつた。(『祖父』二十四)(『内村鑑三先生の憶ひ出』)

12・1(金) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマ二日、東京三十九年一月七日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・6(水) 河上肇が学習院に辞表を提出。(『河上肇全集』年譜)

直哉は高等学科時代、河上肇の「経済学」の授業を受けた。最初は法科へ行く連中のお付き合ひだったが、しまいに引き込まれて聴いた。「無我愛」に入る前で興奮したような熱のある講義振りで、非常に面白かつた。河上は最後の挨拶で、自分の講義はつまらなかつたかも知れないが、大学の講義よりはよかつたつもりだと言う。(『演説の印象』(対談『内村鑑三その他』)

12・10(日) 直哉は写真を撮影。(『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真)

12・12(火) 直哉はノートに《米ちゃん》についてメモする。(『ノート1』補⑤P337)

12・13(水) 直哉は、安逸な生活から脱し、独立しようとノートに記す。(「ノート1」補⑤P337～339)

この頃 直哉は「よろしく」という演説を準備。(「ノート1」補⑤P341～343)

12・18(月) 直哉は、「学習院輔仁会雑誌」第六十七号「雑録」欄に、「某」の署名で『邦語部に就て』を発表。「秋季行軍記事」

欄の「銃烟」に、「奈加葉」の署名で『扇町屋軍談』、「それがし」の署名で『命令だ』と「さうかね」を発表。(新

『志賀直哉全集』⑩)

12・20(水) 三河屋で、木下利玄らが、直哉に寄せ書きの葉書を書く。二十一日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・21(木) 直哉は『死猿』として河上先生を訪問する夢を書く。同日か翌日、『○余の専心、なすべき事』として《第一、祖父

の看病、／第二、作文、及び、己が前途、(独立すべきか)／第三、読残せし本を読み終る事、／第四、イブセン研究、
／第五、観劇、浄瑠璃、／第六、ゴルキー研究、》と記す。(未定稿9)

12・23(土) 直哉は木下利玄に絵葉書を書く。毎日午後一時から四時までなら話が出来るのでいらつしやい、とのこと。(M38・

12・23木下利玄宛書簡)

12・25(月) 正親町公和が直哉にクリスマス・カードとして絵葉書を送る。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・26(火) 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。『神の国は汝らの内にあり』を讀了とのこと。(『武者小路実篤全集』)

この頃 直哉は《○余は、余の生活に大なる変化を与ふる事をつとめんとす、第一歩として、余は余の家庭を出でざるべから
ず。》《次に余は、余の国を去らざるべからず、国を出で、余はかんそうせる露國に趣かん、ゴルキーの食客たるを
得ば、快事ならざるべからず、》などとノートに記す。(「ノート1」補⑤P345～346)

この頃 直哉は、「長生」について考える。(「ノート1」補⑤P346)

冬休み 里見弴は、直哉に勧められてスーデルマンの『フラウ・ゾルゲ』の英訳を読む。ゴリーキーも勧められた。(里見弴

『君と私』(十一)

12・28(木) 武者小路実篤が直哉に葉書を書く。(『武者小路実篤全集』)

12・29(金) 伊豆山の川村弘が東京の直哉に手紙を出す。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

12・30(土) 正親町公和が直哉に絵葉書を送る。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・? 米国の末永馨から送ってきた雑誌“*The World's Work*”の中にW. G. Fitz-Geraldの書いたロダン評伝が載っていて、その写真を見て直哉は、ロダンを見出し、正親町公和に教えた。この雑誌によって、友人間にロダンが知られた。最初はロディンと発音していた。(M. 43・11「白樺」編集後記)(座談会『「白樺」座談会』)

*“*The World's Work*” (1905・11) にて William G. Fitz-Gerald の “*A Personal Study of Rodin*” が掲載され、ロダンの彫刻等の写真も多数載っている。

12・? 直哉は、中学生の時には面白くなかった尾崎紅葉『多情多恨』を読んで感心した。祖父の看病をしながら夜更かしして読んだ。字の使い方や帳面(↓「手帳11」補⑤P. 307)に書き写した。(座談会『回顧』)(対談『小説について』)(愛読書回顧①)

この年か? 前年か?

志賀直道が相馬家の為に朝鮮に広大な土地を買うことを考える。日韓併合を予測してのことだった。みな反対するが、直哉は、やり遂げようとして祖父が長生きすると考え、賛成する。(『稲村雑談』「祖父」(『祖父』二十一))
この年か? 翌年か? (直三が七つ八つの頃)

毎日のように、志賀直温は、朝寝ぼけをしてしている直哉を起こすよう志賀直三に命令する。(志賀直三『阿呆伝』)
この年からか?

『稲村雑談』によれば、直哉は落語研究会が出来た頃(M. 38・3・21第一次落語研究会の第一回公演)から寄席に行くよう

になり、落語研究会をよく聴きに行った。歌舞伎・娘義太夫よりは後。小さん・円喬・円右・円左・小円朝など。円蔵・馬楽・新内の紫朝なども居た。みな一生懸命やったから面白かった。特に小さんが好きだった。円右の芝居から筋を引いた人情噺もうまかったが、円喬が一番うまかったかも知れない。円朝は死んだ後だった。

*『清談 落語と自分』によれば、円喬の「鰻沢」がうまかった。

この年 志賀直道の兄弟が直道・留女夫妻の金婚を祝い、金盃に住所・氏名・年齢を記す。西りき（八十八才）、志賀直道（七

十九才）、佐藤うの（七十五才）、石田茂宗（七十三才）、半谷重固（七十才）。（桜井勝美『志賀直哉の原像』）

この年 勘解由小路康子、華族女学校中退。（阿川弘之『志賀直哉』）